

人形のお医者さん

小さい頃、人形で遊んだことのない人はいないだろう。男の子の場合「お人形遊び」や「おままごと」をした記憶はなくとも、ゆりかごで眠っていた頃には、きつとその横にかわいいぬいぐるみのひとつもあつたに違いない。

人形の歴史は人類の歴史と同じぐらい古い。石器時代の遺跡からも石や木、動物の毛皮で作ったそれらしきものが見つかっている。ヨーロッパ中世の人形は、だいたい木で作られていた。ルネッサンスの時代になると臘ろうでできたものが、主にイタリアとドイツで作られるようになった。そしてその

後は陶器製のものへ、と変化していく。

この頃から人形はふたつの方向に分かれて発達しはじめる。そのうちひとつは、言わずと知れた子供の遊び相手としての人形、そしてもうひとつは、フランスの宮廷や貴族の間で流行した、モデルとしての人形である。

洋服屋は貴族のドレスを仕立てるとき、まずその人物をかたどった人形を製作した。これに出来上がった洋服を着せて披露するわけだ。大人はともかく、子供の場合にはよく行われた方法だった。

洋服を仕立てるばかりでなく、たとえば孫に似せて作らせた人形にきれいな洋服を着せ、遠くに住んでいる親戚に送る、などという事も結構やったらしい。肖像画を贈るよりはずっとインパクトの大きなプレゼントだっただろう。

こういった人形は、たとえ子供であろうとも身分の高い人の身代

わりだから、その威厳が損なわれるようなものを作ると、即牢獄行きとなる。ニコッとはほえんではないような表情は、それがいくらかわいなくても御法度だった。

骨董品の人形をじつと眺めていると、化けて出そうな気迫が感じられる。夢の中にも出てこれたら、うなされそうだ。それだけ真に迫ったエネルギーを秘めた人形は、間違いなく芸術品といえるだろう。

こうした人形は飾られるばかりでなく、当然これを贈られた家庭の子供のおもちゃにもなっただろう。

19世紀頃には玩具としての人形が広く一般市民の家庭にも浸透していった。熊やその他の動物のぬいぐるみが出来たのもこの頃だし、1890年あたりからはセルロイドの人形も大量生産されるようになった。

当時の人形工場はかなり大がが



修理に出された人形

りなもので、300人以上もの職工を使っていたところもあるぐらいだ。

人形の原形を作り、石膏で型にとる。この型を使って大量生産が行われるのだ。陶器の人形は撰氏1300度ぐらいで焼かれ、その後色付けされる。この色付けも、単に染料で描かれるだけの場合と、その後もう一回釜に入れ、700度ぐらいで焼きつけられるものがある。もちろん焼きつけの方が美しいし、値段もはる。

こうした人形はお婆さんからお母さんへ、そして子、孫へと受けつがれ、現在骨董として蒐集対象にされる人形には70年から80年前のものが多い。今まで人形として一番の高値がついたのは1909年に作られた58センチの大きさのもので、9万4千マルク（800万円）というもの。普通の骨董人形は、価値のあるものでもだいた



居並ぶ人形たち

い100万円前後である。

人形は遊び道具でもあり、壊れてしまふ事がある。大好きな熊さんの手が取れてしまつて泣いた覚えのある人も多いだろう。

熊のぬいぐるみだろうが、骨董の人形だろうが、壊れた人形は何でもなおしましょう、という人がウィーンにいる。ヨハン・ハイダーさんだ。

ハイダーさんは幼い頃から物を修理するのが大好きだった。当初はウィーン市役所に勤めていたが、とうとう趣味が昂じて1986年に自分の店を出すに至った。脱サラである。

一生心配のない公務員職をなげうってしまったのだから、大した勇氣だ。でも全く後悔はしていないとの事。そればかりかこの所は仕事が多すぎて、修理を依頼しても今の所2か月待ちぐらいは覚悟しないと、との事。



魔術師のような「人形のお医者さん」とヨハン・ハイダーさん

マリオットホテルの近く、ヘーゲルガッセ(Hörlgasse)の5番地に開店した当初はまだ「使い捨て文化」の名残りが濃厚で、心配したそう。しかし最近では壊れたものを修理して愛用する気風が高まり、ハイダーさんはうれしい悲鳴をあげている。

電池で動く玩具は部品の関係で修理不可能なものも少なくないが、それ以外のものならば何とかできるだけなおしましょう、というのがハイダーさんのモットー。

割れてしまったセルロイドも新しく造型して修理し、洋服や靴も新調してくれる。人形達の目玉や髪の毛などは各色・種類をとりまぜて充分なストックがある。

その上シヨールームでは新しい人形や、古いもののレプリカも多数販売している。ウィーンに遊びに行ったら、ちょっと寄ってみてはいかがですか？



「人形のお医者さん」はヘーゲルガッセにある